

半七捕物帳

あま酒売

岡本綺堂

青空文庫

「また怪談ですかえ」と、半七老人は笑った。「時候は秋で、今夜は雨がふる。まったくあつらえ向きに出来ているんですが、こつちにどうもあつらえむきの種がないんですよ。なるほど、今とちがつて江戸時代には怪談がたくさんありました。わたくしもいろいろの話をきいていますが、商売の方で手がけた事件に怪談というのは少ないものです。いつかお話した津の国屋だって、大詰へ行くとあれです」

「しかし、あの話は面白うござんしたよ」と、わたしは云った。「あんな話はありませんか」

「さあ」と、老人は首をかしげて考えていた。「あれとは又、すこし行き方が違いますがね。こんな変な話がありましたよ。これはわたくしにも本当のことはよく判らないんですがね」

「それはどんなことでした」と、わたしは催促するように云った。

「まあ、待つてください。あなたはどうも気がみじかい」

老人は人をじらすように悠々と茶をのみはじめた。秋の雨はびしゃびしゃというような音をたてて降っていた。

「よく降りますね」

外の雨に耳をかたむけて、あたまの上の電燈をちよつと仰いで、老人はやがて口を切つた。

「安政四年の正月から三月にかけて可怪おかしなことを云い触らすものが出来たんです。それはどういう事件かというと、毎日暮れ六ツ——俗にいう『逢魔わうまが時とき』の刻限から、ひとりの婆さんが甘酒を売りに出る。女のことですから天秤をかつぐのじゃありません。きたない風呂敷に包んだ箱を肩に引っかけ、あま酒の固練かたねりと云つて売りあるく。それだけならば別に不思議はないんですが、この婆さんは決して昼は出て来ない。いつでも日が暮れて、寺々のゆう六ツの鐘が鳴り出すと、丁度それを合図のようにどこからかふらふらと出て来る。いや、それだけならまだ不思議という段には至らないんですが、うっかりその婆さんのそばへ寄ると、きつと病人になつて、軽いので七日なのかや十日とおかは寝る。ひどいのは死んでしまふ。実におそろしい話です。その噂がそれからそれへと伝わって、気の弱いものは逢魔が時を過ぎると銭湯せんとうへも行かないという始末。今日の人達はそんな馬鹿な事があるもの

かど一と口に云つてしまふでしょうが、その頃の人間はみんな正直ですから、そんな噂を聞くと竦毛おぞげをふるつて怖がります。しかも論より証拠、その婆さんに出逢つて煩わづらいついた者が幾人もあるんだから仕方ありません。あなた方はそれをどう思います」

私にはすぐに返事が出来ないのです、ただ黙つて相手の顔を見つめてみると、老人はさもこそといったような顔をして、しずかにその怪談を説きはじめた。

その怪しい婆さんを見た者の説明によると、かれはもう七十を越えているらしい。麻のように白く黄いろい髪を手拭につつんで、頭のうしろでしつかりと結んでいた。筒袖かとも思われるような袂のせまい袷あわせの上に、手織り縞しまのような綿入れの袖無し半纏はんでんをきて、片褌かたづまを端折はしよつて藁草履をはいているが、その草履の音がいやにびしゃびしゃと響くということであつた。しかしその人相をよく見識みしつてゐる者がない。かれに一度出逢つた者も、うす暗いなかに浮き出している梟ふくろうのような大きい眼、鳶とんびの口くちばし嘴くちばしのような尖つた鼻、骸骨のように白く黄いろい歯、それを別々に記憶してゐるばかりで、それを一つにまとめて人間らしい者の顔をかながえ出すことは出来なかつた。

かれは唯ふらふらと迷い歩いてゐるのではない、あま酒を売つてゐるのである。なんにも知らずにその甘酒を買つた者もたくさんあつたが、その甘酒に中毒したものはなかつた。

又その甘酒を買った者がことごとく病みついたというわけでもなかった。往来でうつかり出逢った者のうちでも、なんの祟りも無しに済んだものもあった。つまりめいめいの運次第で、ある者は祟られ、ある者は無難であった。いずれにしても婆さんの方は何事を仕向けるのでもない。ただ黙ってゆき違うばかりで、不運の者はその一刹那におそろしい災難に付きまとわれるのであった。

眼にも見えないその怪異に取り憑かれたものは、最初に一種の瘡疾にかかったように、時々ひどい悪寒がして苦しみ悩むのである。それが三日四日を過ぎると更に怪しい症状を表わして来て、病人はうつむいて両足を長くのばし、両手を腰の方へ長く垂れて、さながら魚の泳ぐような、蛇の蜿くるような奇怪な形をして這いまわる。さりとして家じゅうを這いまわるのでもない。大抵は敷蒲団の上を境として、その上を前へうしろへ、右へ左へ蜿うつのである。それが魚というよりむしろ蛇に近いので、看病の人たちはうす気味悪がった。思いなしか病人の眼は蛇のように忌らしくみえて、口から時々紅い舌をへらへらと吐く。こうした気味の悪い病症を三日五日も続けた後に、病人の熱は忘れたように冷めてけろりと本復するが、病中のことはなんにも記憶していない。なにを訊いても知らないという。しかしそれらは軽い方で、重いになるとその奇怪の症状を幾日も続けているう

ちに、とうとう病み疲れて藻搔もがき死にの浅ましい終りを遂げる者もあった。それが僅かに一人や二人であつたならば、蛇を殺した祟りとでも云われそうなことであつたが、なにをいうにも大勢であるために、その病人をことごとく蛇を殺した人間と認めるわけにも行かなかつた。殊にそのなかには蛇を殺すどころか、絵に描いた十二支の蛇を見てさえも身をすくめるような若い娘たちもあつたので、蛇の祟りと決めてしまうことは出来なかつた。「と云つても、あの蜿くる姿はどうしても蛇だ」

こつちに崇られるような覚えがなくても、向うから崇るのであろう。蛇に魅みこまれるという伝説は昔からたくさんある。どう考えてもあの婆さんはやはり蛇の化身けしんで、なにかの意味で或る男や或る女を魅こむに相違ない。この説が結局は勝を占めて、怪しい老婆の正体は蛇であると決められてしまった。それが更に尾鱗おひれを添えて、ある剛胆な男がそつと彼の婆さんのあとをつけて行くと、かれは不しのばずの忍池の水を渡つてどこへか姿を隠したなどと、見て来たように吹ふい聴ちようする者もあらわれて来た。不しの忍ぼの弃天に参詣して巳みの日の御まもりをうけて来た者は、その禍いを逃がれることが出来るなどと、まことしやかに説明する者もあらわれた。

それが町まち方かたの耳にはいると、役人たちも打つちやつて置くわけには行かなくなつた。

由来、かような怪しい風説を流布して世間を騒がす者は、それぞれ処罰されるのが此の時代の掟であつたが、それが跡方もない風説とのみ認められないので、先ずその本人のあま酒売りを詮議することになつた。しかし、彼女の立ち廻る場所がどの方面とも限られていないので、江戸じゆうの岡っ引一同に對してかれの素姓あらためを命ぜられ、次第によつては即座に召し捕つて苦しからずということであつた。

八丁堀同心伊丹文五郎は半七を呼んでささやいた。

「今度の一件を貴様はどう思うか知らねえが、悪くすると磔刑のお仕置ものだぞ。その積りでしつかりやつてくれ」

「クルスでございますかえ」

半七は人差指で十字の形を空に書いてみせると、文五郎はうなずいた。

「さすがに貴様は眼が高い。蛇の祟りなんぞはどうも真に受けられねえ。ひよつとすると切支丹だ。奴らがなにか邪法を行なうのかも知れねえから、そこへ見当をつけて詮索してみろ」

こつちも内々それに目星をつけたので、半七はすぐに受け合つて歸つた。しかし、どこから先ず手を着けていいのか、彼もさすがに方角が立たないので、家へ歸つてからも眼を

とじて考えていたが、やがて台所の方にむかつて声をかけた。

「おい、誰かそこにいるか」

「あい」

台所につづいた六畳の間に、大きい火鉢を取りまいていた善八と幸次郎とがばらばらと起つて来た。

「おめえたちはあま酒売りの婆さんを知っているか」と、半七は訊いた。

「出つくわしたことはありませんが、噂だけは聞いています」と、善八は答えた。

「伊丹の旦那からのお指図だ。どうかしにやあならねえ。この一件は俺ばかりじゃねえ、みんなも総がかりでやる仕事だから、なんでも早い勝ちだ。そこであんまり知恵のねえ話だが、まあお定まりの段取りで仕方がねえ。おめえ達はこれから手わけをして、甘酒の卸し売りをする問屋をみんな探してくれ。婆ばあだつて自分の家であま酒を作るわけじゃあるめえ。きつとどこかで毎日仕入れて来るんだらうから、そういう変な婆ばあが来るか来ねえか、方々の店で聞き合わせてくれ。こんなことは誰もがみんな手をつけることだらうが、こつちも心得のために一応は念をついて置かにやあならねえ」

ふたりの子分を出してやって、半七は午ひるめし飯いひを食つてしまうと、三月末の春の日はうら

らかに晴れていた。家にぼんやりと坐つてもいられないので、半七はどこをあてとも無しに神田の家を出て、百本杭ぐいから吾妻橋あずまの方角へ、大川端をぶらぶらと歩いてゆくと、向島の桜はまだ青葉にはなり切らないので、遅い花見らしい男や女の群れがときどきに通つた。その賑やかな群れのあいだを苦労ありそうにしよんぼりとうつむき勝ちに歩いている一人の若い男が、その蒼ざめた顔をあげて半七の姿をふと見付けると、なんだか臆病らしい眼をしながら彼のあとをそつと尾つけて来るらしかった。

最初は素知らぬ顔をしていたが、こつちの横顔をぬすむように窺いながら三、四間ほども付いて来るので、半七も勃然むっとして立ち停つまつた。

「おい、大哥あにい。わつしになにか用でもあるのかえ。花見どきに人の腰を狙めつてくると、巾き着ん切ちやつつきと間違ちがげえられるぜ」

睨み付けられて男はいよいよ怯おびえたらしい低い声で、ごめんなさいと丁寧に挨拶して、そのままそこに立ちすくんでしまった。気障きざな野郎だと思おもいながら、半七もそのまま通り過ぎたが、よほど行き過ぎてから彼はふと考えた。あの若い男の人相や風体は巾着切りなどではないらしい。勿論こつちで見覚えのない男であるが、或いは向うではこつちの顔を見知しつていて、なにか話し掛けようとしながらも、つい気怯きおれがしてそのままに云いそび

れてしまったのではあるまいか。もしそうならばあらことば暴い詞をかけるのではなかったと、半七は少し気の毒になつて元来た方をふり返ると、男の姿はもう見えなかった。

二

それから二日目の七ツ下がり（午後四時過ぎ）に、善八と幸次郎が半七の長火鉢のまえに鼻をそろえた。二人はほかの子分たちとも申し合わせて、江戸じゅうの間屋を片つ端から調べてあるいたが、その怪しい婆さんは毎日おなじ家へ仕入れに來ないらしい。最初のうちはほんじょう本所四ツ目の大坂屋という店へ半月以上もつづけて來たが、その後ばったりと來なくなつた。近頃ではやはり四ツ目の水戸屋という店へ三日ほどつづいて來たが、水戸屋ではかれの噂を知っているので、若い者のひとりが見えがくれにそのあとを尾つけると、かれは浅草の方角に向つて遅のろのろ々とたどつて行つた。しかしどこまで行つても際限がないので、こつちもしまいに根こんま負けがして、途中から空しく引つ返して來た。こういう訳で、かれの居どころはたしかに突き留められなかつた。こつちに尾けられたことを彼女はおそらく覺さとつたのであろう、そのあくる日から彼女は、その瘦せた姿を水戸屋の店先に見せなく

なつた。それは三月初めのことで、その後はどこの問屋を立ちまわっているか、誰も知っている者はないとのことであつた。

「ところで、親分。ついでに妙なことを聞き出して来たんですがね」と、善八は云つた。

「やつぱりその婆に係り合いのあることなんですが、なんでも五、六日まえの午過ぎだそうですね。浅草の馬道うまみちに河内屋という質屋があります。その女中のお熊というのが近所へ使いに出ると、やがて真つ蒼になつて内へかけ込んで来て、自分の三畳の部屋をびつしやり閉め切つてしまつて、小さくなつて竦すくんでいたそうです。なんだか変だと思つていと、誰が見つけたか知らねえが、河内屋の裏口に変な婆が来てそつと内をのぞいていて、このので、番頭や小僧が行つて見ると、なるほど忌いやに影のうすい婆が突つ立っている。変だとは思つたが、真つ昼間のことだから大きな声で呶どな鳴り付けると、婆は忌な眼をしてこつちをじつと見たばかりで、素直すなおに何処へか行つてしまつた。行つてしまつたのはいいが、その晩から番頭ひとり小僧一人が瘡疾おこりのように急にふるえ出して、熱が高くなる、蒲団の上をのたくる。医者にみせても容態はわからない。相手が変な婆であつたもんだから、それもきつと例のあま酒婆だつたということ、家うちじゆうのものは竦毛おそけをふるつていて、うです。その時に出てみたのは、番頭ふたりと小僧一人だつたんですが、ひとりの番頭だ

けは運よく助かったとみえて、今になんにも祟りがなく、ほかの二人が人身御供ひとみごくうにあがつた訳なんです。妙なこともあるじゃありませんか。してみると、その婆は夜ばかりでなく、昼間でもそこらにうろついているに相違ねえというんで、近所の者もみんな蒼くなっているんですよ」

「そうして、その熊という女はどうした。それには別条ねえのか」

「その女中にはなんにも変ったことはないそうです。なんでも使いに行つて帰つてくると、その途中から変な婆がつけて来て、薄っ気味悪くて堪まらねえので、一生懸命に逃げて来たんだということですよ」

「おめえはその女を見たのか」

「見ません。なんでも河内屋へ出入りの小間物屋の世話で住み込んだ女で、年は十九か二十歳たちぐらいだが、台所働きにはちつと惜しいような代物しろものだそうですね」

「その小間物屋というのは何という奴だ」と半七はまた訊きいた。

「その小間物屋はわつしが識しっています」と、幸次郎が代つて答えた。「徳という野郎で、徳三郎か徳兵衛か知りませんが、まだ二十三の生なまつ白しろい奴やつです。道楽者で江戸にもいらねえんで、小間物をついで旅あきないをしていたんですが、去年の七、八月ごろから

江戸へまた舞い戻つて来て、どこかの二階借りをして相変らず小間物の荷を担ぎあるいて
いるようです」

「そうか。よし、判つた。じゃあ、おめえはその徳という野郎の居どこをさがして引つ張
つて来てくれ。おれはその馬道の質屋へ行つて、もう少し種を洗つてくるから」

「わつしも行きましょうか」と、善八は顔をつき出した。

「そうよ。又どんな用がねえとも限らねえ。一緒にあゆんでくれ」

「ようがす」

善八を案内者につれて、半七が馬道へゆき着いた頃には、このごろの長い日ももう暮れ
かかつて、しょうてん 聖天の森の影もどんよりと陰くもつていた。

「なんだか忌いやな空合あひになつて来ましたね」と、善八は空を仰ぎながら云つた。

「むむ。まったくいやな空だ。今夜は一つ降るかも知れねえ」

つむじかぜ 旋風のような風が俄かにどつと吹き出して、往来には真つ白な砂けむりが渦をま
いて駆けまわつた。ふたりは片袖で顔を掩おほいながら、まちや 町屋の軒下を伝つて歩いていると、夕
ぐれの色はいよいよ黒くなつて来て、どこかで雷の声かみなりがきこえた。

「おや、雷が鳴る。妙な陽気だな」

そのうちに、ふたりは河内屋の暖簾のれんの前に来たので、善八はすぐに格子をくぐって、帳場にいる番頭に声をかけた。

「もし、番頭さん。親分がすこし用があるんだ。ここじやあいけねえから、表までちよいと顔を貸してくんねえ」

「はい、はい」

四十五六の番頭が帳場から出て来て、暖簾の外に立っている半七に挨拶した。

「お前さんがここの番頭さんかえ」と、半七は手拭で顔の砂をはらいながら訊きいた。

「さようでございます。利八と申して、河内屋に三十四年勤めて居ります。どうぞお見識り置きを……」

「そこで利八さん。早速だがお前さんにちつと訊ききたいことがある。この間、こつちの裏口を変な婆さんが覗のぞいていたとかいうじやありませんか」

「はい。とんだ災難で、番頭ひとり小僧一人が今にどつと寝付なまころいて居ります」

利八の話によると、番頭と小僧はきょうまで熱なまが下がらないで、生殺なまころしの蛇のたのように蜿たうち廻まわっている。奉公人どもは気味を悪わるがって誰も寄り付かないので、主人と自分が代る代るに看病なほしているが、なかなか三日や四日では癒なほりそうもない。世間の噂うわさを綜合し

てかんがえると、その時の怪しい婆さんはどうも彼の甘酒売りらしく思われる。実はきのうの午過ぎにも、その婆さんらしい女が店の前をうろ付いているのを近所のものが認めたとかいうので、この上にも重ねてどんな禍いがあるうかと、自分たちも内々恐れていると、かれは小声で半七に訴えた。

「それからお前さんの家にお熊という女がいるそうですね」

「はい。西国生まれだそうで、年は明けて十九でございます。ちょうど去年の九月、今までの奉公人が急病で暇をとりまして、出代り時でもないもんですから、差し当りその代りの女に困って居りますところへ、てまえ方へ質を置きにまいります徳三郎という小間物屋さんが、時にこんな女があるから使ってくれないかと申しますので、ちょうど幸いと存じて雇い入れましたような訳でございますが、人柄も悪くなし、人間も正直でよく働きます。で、これはよい奉公人を置きあてたと申して、主人を始めわたくし共も喜んで居ります」

「こつちに親戚でもあるんですかえ」

「なんでも芝の方の御屋敷の足輕を頼ってまいったのだそうでございます。と申しますと、まことに不念のよう**ぶねん**で恐れ入りますが、なにぶん手前どもでも困っている矢先でもあり、

徳さんが万事をひき受けると申しますものですから、その上にくわしくも詮議いたしませんで……」と、利八は小鬢こびんをかきながら答えた。

「その後、そのお熊になにも変った様子はないんですね」

「別に変ったこともございませんが、一度その婆さんにあとを尾つけられてから、表へ出るのをひどく忌いやがるので困ります。もつともそれは無理もありませんので、大抵の使いにはほかの小僧を出して居りますが、当人も別に病氣というわけでもございませんから、家の内ではいつもの通りに働いて居ります。御用があるなら唯今呼んでまいりましょうか」

「いや、呼んじやあまずい」と、半七は首を振った。「うら口へまわって、そつとのぞくわけにやあ行きませんか」

「よろしゅうございます。ちようど夕方でございますから、台所ではたらいで居ります筈です。どうぞ隣りの露路からおはいりください」

利八に教えられて、半七はせまい露路の溝どふいた板を踏んでゆくと、この二、三日なまあたかい天気がつづいたので、そこらではもう早い蚊の唸うなる声こがきこえた。半七は手拭を取って頬かむりをして、草履の足音を忍ばせながら、河内屋の水みず口くちに身をよせていると、ひとりの若い女が手桶をさげて来た。うす暗い夕闇のなかにも其の白い顔だけは浮き出し

てみえた。と思う途端に、彼女はそこに忍んでいる半七の姿を見付けてあわただしく小声で訊いた。

「徳さんかえ」

徳さんという男の地声じこえを知らないので、半七は早速に作り声をするわけにも行かなかつた。かれは頬かむりのままで無言にうなずくと、若い女は摺り寄つて来た。

「おまえさん、この頃どうして来てくれないの。あれほど約束したのを忘れたのかえ」

こつちがやはり黙っているの、女はすこしおかしく思つたらしい、だしぬけに片手をのばして半七の頬かむりを引きめくつた。うす暗いなかでもその人違いをすぐに発見したらしく、かれはあれつと叫びながら手桶をほうり出して内へ逃げ込んだ。

手拭も一緒にほうり出されたので、半七はそれを拾つて泥をはたいていると、その頭の上を大きい雷ががらがらと鳴つて通つた。

三

表へ出ると、利八と善八が待つていた。今鳴つた雷の音につれて、雹ひょうのような大粒の雨

がばらばらと落ちて来たので、利八はしばらく雨やどりをして行けと勧めたが、半七はそれを断わって、そのかわりに番傘を一本借りて出た。

「親分、相合傘あいあいがさじゃあ凌しのげそうもありませんぜ」と、善八は云った。

「まあ、仕方がねえ。尻はしよでも端折れ」

雷はだんだん烈しくなつて、傘をたたき破るかと思うような大雨が、どうどうと降りそそいで来た。ふたりの鼻のさきに青い稲妻が走った。

「親分、いけねえ、意気地がねえようだが、もう歩かれねえ」

善八がひどく雷を嫌うことを半七もかねて知つているのと、時刻も丁度暮れ六ツ頃であるので、かれは雨宿りながらにそこらの小料理屋へはいつて、ともかくも夕飯を食うことにしたが、雷はそれから小一こいつとき晌も鳴りつづいたので、善八は口唇くちびるの色をかえて縮み上がってしまった。彼は眼の前にならんでいる膳を見ながら、好きな酒の猪口ちよこをも取らなかつた。話を仕掛けても碌々に返事もしなかつた。

小間物屋の徳三郎とお熊との関係はもう判つた。徳三郎は旅商いに出ているあいだに、どこかでお熊と馴染なじみになつて、かれを誘い出して江戸へ帰つて来たが、差し当りは女の始末に困つて、河内屋へ奉公に住み込ませたに相違ない。それと同時に、このあいだ大川端

で自分に声をかけようとした若い男は、その徳三郎であつたらしくも思われて来た。かれは蒼ざめた顔をして、自分に何事を訴えようとしたのか、半七はいろいろに想像を描いていると、雷の音もだんだんに遠ざかつて、善八は生き返つたように元氣が出た。

「親分、すまねえ。まずこれでほつとしやした。また移り換えもしねえうちから酷い目に逢いましたよ」

「いい塩梅あんばいに小降りになつたようだ。早く飯を食つてしまえ」

早々に飯を食つてそこを出ると、夜は五ツ（午後八時）を過ぎてゐるらしかった。雨はもう小降りになつていたが、弱い稲妻はまだ善八をおびやかすように、時々ふたりの傘の上をすべつて通つた。雷門の方へ爪先を向けた半七は急に立ち停まつた。

「おい、もう一度河内屋へ行つて見ようじゃねえか。考えると、どうも少し気になることがある。もう雨もやんだから、この傘を返しながらお熊という女はどうしているか訊いてくれ」

二人はまた引つ返して河内屋へ行つた。善八だけが内へはいつて、お熊はどうしているかと番頭に訊くと、利八はやはり台所にいる筈だと答えた。しかし念のために見て来ましよう云つて、かれは帳場から起つて行つたが、やがてあわただしく戻つて来て、お熊の

姿はどこにも見えないと云った。善八もおどろいて、すぐに表へ飛び出して 注進ちゆうしんする
と、半七は舌打ちした。

「まずいことをしたな。どうもあの女がおかしいと思つたんだ。いつそあの時すぐに引き
挙げてしまえばよかつた。畜生、どこへ行つたらう」

どっちへ行つたか其の方角が立たないので、二人はぼんやりと門口かどぐちに突つ立っている
と、どこかで女の声がきこえた。

「甘酒や、あま酒の固練り……」

物に驚おそわれたように二人はぎよつとした。そうして、その声のする方角を一度透かして
みると、今の強い雨でどこの店も大戸を半分ぐらいは閉めてしまつたが、そのあいだから
流れ出して来る灯のひかりは往来のぬかるみを薄白く照らして、雷門の方から跣足はだしでびし
やびしやあるいて来る女の黒い影がまぼろしのように浮いてみえた。世間にあま酒を売つ
てあるく者は幾人もある。殊にその声があまり若々しく冴えてひびくので、半七は少し躊躇ちうちよ
したうながが、ともかくも善八を促して路ばたの軒下に身をひそめてみると、声の主はだ
んだんに近寄つて来た。かれはあま酒の箱を肩にかけて、びしよ濡れになつていられるらしか
つた。ふたりは呼吸いきをのんで窺つていると、かれは河内屋のまえに来て吸い付けられたよ

うに俄かに立ち停まった。声は若々しいのに似合わず、彼女がたしかに老女であることを知ったときに半七の胸は波を打った。

かれは先ず河内屋の表をうかがつて、更に露路口の方へまわった。半七もそつと軒下をぬけ出して露路の口からのぞいて見ると、彼女は河内屋の水口にたたずんで、しばらく内を窺っているらしかったが、やがて又引返して表へ出て来た。ここですぐに取り押さえようか、もうちつと放し飼いにして置いて其の成り行きを見とだけようかと、半七はちよつと思案したが、結局黙つてそのあとを尾けてゆくことにした。善八もつづいて歩き出した。二人はさつきから跣足になつていたので、雨あがりのぬかるみを踏んでゆく足音が相手に注意をひくのを恐れて、わざと五、六間も引きさがつて忍んで行つた。

河内屋の露路を出てから、彼女はあま酒の固練りを呼ばなくなった。かれは往来のまん中を黙つて俯向うつむいてゆくらしかった。

「親分。たしかに彼女あいつでしょうね」と、善八はささやいた。

「河内屋を覗いて行つたんだから、あの婆ばばあに相違ねえ」

云ううちに彼女の姿は消えるように隠れてしまったので、ふたりは又おどろいた。善八は少しおじ気が付いたように立ちすくんだ。吉原へゆくらしい駕籠が二挺つづいて飛ぶよ

うにここを駈けぬけて通ると、その提灯の火に照らされて、かれの瘦せた姿は又ぼんやりと暗やみの底から浮き出した。その途端に、かれは思い出したように一と声呼んだ。

「あま酒の固練り……」

この声がしずかな夜の往来に冴えてひびくと、通りぬけた駕籠の一挺が俄かに停まった。ひとりの武士らしい男が垂簾たれをはねて、彼女のそばにつかつかと進み寄った。そうして、なにか小声でふた言三言押し問答しているかと思うと、白い刃のひかりが提灯の火にきらりと映つて、婆は抜き打ちに斬り倒された。かれは声も立てないで、枯れ木を倒したように泥濘ぬかるみのなかに横たわった。武士は刀を納めて再び駕籠に乗ろうとするころへ、半七は駈け寄つてその棒鼻をさえぎった。

「しばらくお待ちくださいまし。わたくしは町方まちかたの者でございます。唯今のは試し斬りでございますか、それとも何か仔細つみとががございますか」

たといそれが武士であろうとも、みだりに試し斬りなどをすれば立派な罪人である。次第によつては、かれも切腹の罪科つみとがは免かれない。相手を斬つてうまく逃げおおせればいいが、それが町方の眼にとまったりすると、甚だ面倒になる。飛んだところを見つけられず、武士はひどく迷惑したらしく、しばらく口籠つて躊躇していると、まえの駕籠からも

一人の武士が出て来た。どちらも若い武士であつたが、新らしく出て来た一人は幾らか場慣れてゐるらしく、半七にむかつて我々は決して試し斬りではないと弁解した。しかし、その仔細を云うわけには行かない。屋敷の名を明かすわけにも行かない。どうかこのまま見逃がしてくれと彼はしきりに頼んだが、半七は素直に承知しなかつた。一旦自分の眼にとまつた以上、見す見す人殺しを見逃がすことは出来ないと言ひ張つた。それは勿論正当の理窟であつたが、もう一つには折角ここまで追いつめて来た大事の捕り物を、横合から不意に出て来て玉無しにされてしまつたという業腹ごうはらがまじつて、半七は飽くまでも意地悪くこの武士を窘いじめにかかつた。

窘められて、相手はいよいよ困つたらしく、結局は金づくで内済にしたいようなことまで云い出したが、半七はどうしても肯きかないで、とうとう彼等二人を再び駕籠にのせて、無理無体に近所の自身番へ引き摺つて行つた。婆を斬つた若い武士はもう覚悟を決めてゐるらしかつた。

「たといなんと申されても屋敷の名を明かすわけにはまいらぬ。たつて役人に引き渡すとあれば、手前これにて切腹いたす」

こうなると、半七もなんだか可哀そうにもなつて来て、いつまでも彼等を窘めていられ

なくなつた。彼はほかの武士を表へ呼び出して、論さとすようにささやいた。

「あなた方が辻斬りでないことは私も大抵察しています。ふたり連れで駕籠にのつて、辻斬りをしてあるくのは珍らしい。それにさつき見ていると、あの婆さんの甘酒の固練りという声を聞くと、急に駕籠を停めさせてあつちのお武家が出て行つた。それにはなにか訳があるらしい。あなた方はあの婆さんを御存じなんですかえ。御存じならば話してください。その訳さえわかれば、なにも無理に屋敷の名を聞くにも及びません。実を云うと、わたくしはこの間からあの婆さんを尾つけているんです。それを横合いからだしぬけにばつさりやられてしまつちやあ、わたくしの役目が立ちません。それを察して正直に話してください。くどくも云うようだが、訳さえわかれば決して御迷惑はかけませんから」

武士はそれでもまだ渋つていたが、半七からいろいろに説きすかされて、彼もようよう納得なつとくしたらしく、内に引返して一方の武士と何かしばらくささやき合つていたが、結局思い切つてその事情を打ち明けることになつた。

「では、屋敷の名は申さんでも宜しゆうござるな」

「よろしゆうございます」

なんとかして、彼等に口を明かせなければならぬので、その白状を聞かないまゝに半

七は安受け合いに受け合ってしまった。そうして、これから彼等がどんな秘密を打ち明けると、両方の耳を引き立てていると、あたかもそこへ足早に駆け込んで来た者があった。「ああ、親分。いいところへ来ていてくんすった。小間物屋の野郎、とんだことをしやあがつて……女を殺しやがつた」

それは小間物屋の居どころをさがしに行つた幸次郎であつた。

四

幸次郎は小間物屋の徳三郎の居どころを探しあてて、田町に近い荒物屋の二階へたずねてゆくと、彼はあいにく留守であつた。また出直して来ようと思つて表へ出ると、あたかもかの雷雨が襲つて来たので、近所の知人の家へかけ込んで雨やどりをして、小降りになるのを待つて再びたずねていくと、下の婆さんはいなかつた。そつと窺うと、二階には微かに人の唸るような声がきこえたので、彼は猶予なしに駆けあがると、うす暗い行燈あんどうのまえに若い女が血みどろになつて俯向きに倒れていた。そのそばには徳三郎が血に染めた短刀を握つて、喪心そうしんしたようにぼんやりと坐つていた。どう見ても、かれが女を殺した

としか思えないので、幸次郎はその刃物をたたき落としてすぐに縄をかけた。徳三郎は別に抵抗もしなかった。

倒れている女をあらためると、まだ微かに息が通っているらしかったので、幸次郎は近所の者を呼びあつめて医者を迎いにやったが、その医者の来ないうちに女は息が絶えてしまった。その出来事を報告するために、幸次郎は縄付きの徳三郎を近所のものに張り番させて、とりあえずここへ駆け付けて来たのであった。

婆殺しと女殺しと二つの事件が同時に出来^{しゅつたい}して、しかもそれが何かの糸を引いているらしく思われたので、半七はすぐに徳三郎を自身番へひき出させた。真つ蒼になつて牽^ひかれて来た徳三郎は、たしかに大川端で出逢つた若い男であつた。

「おい、徳三郎。おれの顔を識っているか」

徳三郎は無言で頭を下げた。

「おれはまだ見ねえが、殺した女は河内屋のお熊だろう。とんでもねえことを仕^し出来^でしゃあがつた。手前なんで女を殺した。素直に申し立てろ」

「親分さん。それはお目違いでございます」と、徳三郎は喘^{あえ}ぐように云つた。「わたくしは決して女を殺しは致しません。お熊は自分で乳の下を突きましたのでございます。わた

くしが慌てて刃物をもぎ取りましたけれど、もう間に合いませんでございました」

「その短刀は女が持っていたのか」

「いいえ、わたくしの品……」と、徳三郎は云いよんだ。

「はつきり云え」と、半七は叱った。「てめえの短刀をどうして女に渡したんだ。てめえもまた商売柄に似合わねえ、なんで短刀なんぞを持っているんだ」

「はい」

「何がはいだ。はいや炭団たどんじや判らねえ。しつかり物を云え。お慈悲につめてえ水を一杯のましてやるから、逆のぼ上せを下げた上でおちついて申し立てろ。いいか」

善八が持つて来た茶碗の水を飲みほして、徳三郎は初めて一切の事情をときれとぎれに申し立てた。彼は浅草で相当な小間物屋の俵に生まれたが、放蕩のために身代をつぶして、一旦は江戸を立退たちくこととなった。やはり小間物の荷をかついで、旅あきないに諸国を流れ渡っているうちに、彼は京大阪から中国を経て九州路まで踏み込んだ。そうして、ある城下町にしばらく足を止めているあいだに、かれはその城下から一里ばかり距はなれた小さい村の女と親しくなった。女はかのお熊であった。お熊はお綱という老母と二人暮しであったが、この村の習いとしてほかの土地のものとは決して婚姻を許さない掟おきてになっているの

で、お熊は母を捨てて逃げた。徳三郎もはじめは旅先のいたずらにすぎない色事いろごとで、その女を連れ出して逃げるほどの執心もなかったのであるが、かれに魅みこまれたが最後、もうどうしても逃げることの出来ない因果にまつわられていた。お熊はこの土地でいう蛇へびの血統であった。

ここらには蛇神という怖ろしい血統があった。その血をうけて生まれた者は一種微妙の魔力をもつていて、かれらの眼に強く睨にらまれると其の相手はたちまち大熱に犯される。単にそればかりでなく、熱もたに悶もたえて苦しんで、さながら蛇のように蜿のたうちまわる。蛇神の名はそれから起つたのである。しかし、彼等はいかに眼を大きくして睨にらんだからといって、それだけでは決して相手に感応させるわけには行かない。それにはかならず、強い感情を伴なわなければならない。妬ねたむ、憎にくむ、怨うらむ、羨うらやむ、呪のろう、慕かなう、哀あはれむ、喜よろこぶ、恐おそれる。そうした喜怒哀楽の強い感情がみなぎったときに、かれらの眼のひかりは怖るべき魔力を以つて初めて相手を魅ますることが出来るのである。したがって、彼ら自身も故意にその魔力を応用することが出来ない。あいつを一つ苦しめてやろうなどと悪いた戯たずら半分ぶんぶんに睨にらんだところで、決してその効果はあらわれない。要するにそれは彼の心の奥から湧わき出してくる自然ぜんの作用で、自分自身にも無理に抑おさえることも出来ず、無理に働はたらかせることも出来ず、唯

その自然にまかせるほかはないのである。この村の者がほかの土地の者と結婚しないのも、この不思議な血統が主なる原因であった。

徳三郎も初めてお熊に逢ったときに、この怪しい熱病に苦しめられて、お熊の手あつい看病をうけた。病いが癒つてから其の秘密を発見したが、今更どうすることも出来なかつた。捨てて逃げようとしても、お熊はどうしても離れない。それを無理にふり放そうとすれば、お熊の睨む眼が怖ろしかった。もう一つには女が蛇神の血統であることを自分から正直に打ち明けて、どうぞ見捨ててくれるなど泣いて口説かれた時に、かれの心も弱くなつた。所詮はこれも因果とあきらめて、徳三郎はお熊を連れて逃げることを決心した。

かれの決心を強めたほかの動機は、かのおそろしい蛇神も箱根を越せば唯の人間になつてしまつて、なんの不思議を見せることも出来ないという伝説を、土地の老人から聞き知つた為であった。それならばさのみ恐れることもないと幾分か安心して、かれはお熊と共に江戸へ帰つた。九州の蛇神も江戸の土を踏めば唯の女になつたらしく、気のせいか彼女の瞳のひかりも柔らかになつた。お熊は容貌のよい情の深い女で、ほかに頼りのない身の上を投げかけて、かれ一人を杖とも柱とも取り纏つているのを徳三郎は惨らしくも思つた。こうして二人の愛情はいよいよ濃やかになつたが、なにぶんにも小間物の担ぎ商いを

している現在の男の瘦腕では、江戸のまん中で女と二人の口を養ってゆくのがむずかしいので、相談ずくの上でしばらく分かれ分かれに働くこととなって、お熊は男の口入れで河内屋に住み込んだ。幸いにその奉公先と徳三郎の宿とが遠くないので、お熊は主人の用の間をぬすんで時々男のところをたずねていた。

それで小半年は先ず無事にすごしたが、ことしの春になって此の若い二人の魂をおびやかすような事件が突然出来^{しゅつたい}した。二月のなかばの夕方に徳三郎が商売から帰る途中、浅草の広徳寺前でひとりの婆さんがあま酒の固練りを売っていたが、それはたしかにお熊の母のお綱であった。彼女は眼ざとく徳三郎を見つけて、つかつかと寄ってその袂を引っ掴^{つか}んで、娘はどこにいるか直ぐに返せと叫んだ。徳三郎は死神^{しにがみ}に出合ったよりも怖ろしくなつて、殆ど夢中でかれを突き倒して逃げた。その晩から彼は大熱を発して、十日ばかりも蛇のように蜿うち廻つて苦しんだ。

箱根を越せば蛇神の祟りはないという的^{あて}にはならなかった。お綱はわが子のゆくえを尋ねて、九州から江戸まで遙々^{はるばる}と追つて来たのであろう。その強い執着心を思いやると、徳三郎はいよいよ怖ろしくなつて来たので、彼はお熊に因果をふくめて娘を母の手に戻そうと覚悟したが、お熊はどうしても肯^きかなかつた。男にわかれて国へ帰るほどならば、

いつそ死んでしまうと泣き狂うので、徳三郎も持て余した。そのうちに怪しい甘酒売りの噂はだんだん高くなって、それはお綱であることを徳三郎とお熊だけは知っていた。お熊は母に見付けられないように其の出入りを注意していたが、徳三郎はどうかんがえても不安に堪えなかった。世間の評判が高くなるほど彼の恐怖はいよいよ強くなって、再びお綱に見つけられたが最後、今度こそはおそらく自分の命を奪とられるであろうと恐れられた。かれは実に生きている空もなかった。

こうした不安の日を送るうちに、彼は大川端で偶然に半七に出逢った。半七の方では彼を識らなかつたが、徳三郎の方ではその顔を見識っていたので、いつそ此の事情を何もかも打ち明けて彼の救いを求めようかと思つたが、やはり気き怯おれがしてとうとう云いそびれてしまった。しかし運命はだんだんに迫つて来た。お綱は根こんよく江戸じゆうを探しまわつていゝうちに、娘が河内屋に忍んでいることを此の頃いよいよ覺つたらしく、そこらに度々さまよつていゝばかりか、現に河内屋の番頭や小僧が蛇神の祟りを受けたという事実を見せられて、徳三郎の恐怖はもう絶頂に達した。彼は身のおそろしさの余りに、更に怖ろしい決心をかためて、今度お綱に出逢つたならば、いつそ彼女を殺してしまおうと思つめた。徳三郎は短刀を買つて、それをふところにして毎日商あきないに出あるいていた。

彼が借りている荒物屋の二階へ今夜もお熊が忍んで来て、二人にとっては重大の問題がまた繰り返された。徳三郎は短刀を女にみせて、自分の最後の決心を打ち明けた。併しか自分も好んでそんなことをしたくない。人を殺したことが露ろけん顯すれば自分も命をとられなければならぬ。ここでお前がわたしのことを思い切つて、すなおに母の手に戻つてくれれば三方が無事に済むのである。どうぞこれまでの縁とあきらめてくれと、彼はいろいろにお熊を説きなだめたが、女は強情に承知しなかつた。彼女は泣いて泣いて、ものすごいほど狂い立つて、いきなり男の短刀を奪い取つて、自分の乳の下に深く突き透したのである。蛇神の血をひいた若い女は、こうして悲惨の死を遂げた。

「さりとは残念なこと。もう少し早くば、その娘だけは助けられたものを……」と、ふたりの武士はこの悲しい恋物語を聞き終つて嘆息した。「この上はなにを隠そう、われわれはその蛇神の女と同国の者でござる」

彼等もやはり西国の或る藩士で、蛇神のことはかねて知っていた。このごろ江戸じゆうをさわがす怪しい甘酒売りの女は、どうしても彼の蛇神に相違あるまいと、江戸屋敷の者もみな鑑定していた。ついでには早そうばん晩その女が捕われ、なにがし藩の領分内にはそんな奇怪な人種が棲んでいるなどと云い伝えられては、結局当屋敷の外間にもかかわることであ

るから、見つけ次第に討ち果たせと重役から若侍一同に対して内密に云い渡されていたので、かれら二人は今夜その使命を果たしたのであった。しかし半七に対して、あからさまにその事情を説明するときは、自然に屋敷の名を出さなければならぬのと、もう一つには時と場所が悪い。かれらは吉原へ遊びにゆく途中であった。武士気質かたぎの強いかれらの屋敷では、遊里に立ち入ることは厳禁されていた。かれらは半七に意地わるく窘められて、屋敷の名や自分たちの身分を明かすよりも、むしろ死をえら拵ほうと覚悟したのであった。

「これで此の一件もらくちやく落着きました」と、半七老人はひと息ついた。「こう訳が判つてみると、誰が科とが人にんというのでもありません。その時代の習い、武士もこういう事情で斬つたという事であれば、やかましく云うわけにも行きません。わたくしもその事情を察して内分うちぶんにすることにしましたが、八丁堀の旦那にだけはひと通り報告して置きました。徳三郎はこれぞという科とがもないんですが、なにしろこいつが女を引つ張り出して来たのがもとで、こんな騒ぎを仕出来しでかしたんですから、遠島にもなるべきところを江戸払いで軽く済みました。そうして、もう一度旅へ出るつもりで江戸をはなれますと、神奈川に泊まった晩からまた俄かに大熱を発して、とうとうその宿で藻掻き死しにに死んでしまったそうです。

とんだ因果で可哀そうなことをしました。それでも徳三郎は本人ですから仕方がないとして、ほかの人達がなぜ祟られたのか判りません。おそらく前にも云ったような理窟で、ふと摺れ違つたりした時に、向うで何か羨ましいとか小癩こしやくにさわるとか思つて、じつと見つめると、すぐにこつちへ感じてしまうので、向うでは別に祟るといふほどの考えはなくとも、自然にこつちが祟られるような事になつてしまつたのでしよう。なんだか薄気味の悪い話です。一体その蛇神というのはどういふものかよく判りませんが、わたくしの懇意な者に九州の人がありまして、その人の話によりますと、四国の犬神、九州の蛇神、それは昔から名高いものだそうです。嘘のようなお話ですが、彼かの地にはまつたくこういう不思議の家筋の者があつて、ほかの家では決してその家筋のものと縁組などをしなかつたといひます。それに就いてまだいろいろな不思議のお話もありますが、まあこのくらいにして置きましょう。むかしはどこの国にもこういう不思議な伝説がたくさんあつたのですが、こんにち今日ではそんな噂もまつたく絶えてしまいました。学者がたに聞かせたら、それも一種の催眠術だとも云うかも知れませんか」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

入力：網迫

校正：おのしげひこ

2000年10月19日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

あま酒売

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>